

星が再び燃ゆるとき

絵/本文 うみのダイスケ

Jim Barnett
III



【目次】

はじめに	4
◆流れ星を追うもの	6
あの日の流れ星を追って	6
星の流れたさきに	16
荒野での夜明け	28
いまだ越えられないもの	50
◆大泥棒、——時々探偵	66
失くしたものを探して	66
大きな回り道	92
大泥棒、ときどき探偵	108
◆おわりに	158
あとがき	160
参考資料	160



はじめに

ルパン三世の五十周年記念のOVA「ルパンは今も燃えているか？」を視聴し、いてもたってもいられなくなり書き始めた次第です。あの話では、ルパン三世が仲間を盗み返して終わりでしたが、私はどうしても「利き腕を潰された次元大介」がもう一度立ち上がって生きていく姿を見たくてしかたありませんでした。

この話に出てくるルパン三世は、次元大介、石川五エ門、峰不二子のターニングポイントには“未来から送られてきたルパン三世”が入れ替わるように存在してしまったため、仲間のターニングポイントに立ち会えず、よく分からないまま全てを失っていた状態です。

いわば、私の見たいもの書きたいものをしたためています。もし好みが合っていたのなら、楽しんでいただけると幸いです。

そして、好みが合わなかったとしても、この文章を読んでくださったことに、心から感謝申し上げます。

うみのダイスケ

流れ星を追うもの

あの日の流星を追って

『よお、ごくろーさん。お前がこのアジトにたどり着いたってことは、とつくに“左腕”でやれるようになってんだろう？』

『お前のことさ、俺はお前をよく知っているとも。まあ、あるいはよく知らないとも言えるけどな』

すこしだけ古びたカードに書かれている文章は、全く知らないはずの筆跡ではあるが、どこか懐かしさを覚える。ふざけた似顔絵の描かれたカード、恐らく予告状というやつだ。トランプほどの大きさのカードには何行にもわたる文字が連ねられていた。

数年は人が入っていない、そんな埃の積もり方をしている。よく分からない黄金の像もそのまま置き去りにされていた。

『とつくに知っているかも知れねえが、俺の名は“ルパン三世”所謂泥棒ってやつだ』

『お前は俺の大切なものであるといえるし、そうではないともいえる』

『俺は、俺自身のものを取り戻すために、やるべきことをやるってこった。きっとこれをお前

が読んでる頃にや俺のまわりは元通りってな』
到底遺言状には見えない。俺はため息をついた。

数年前、利き腕を潰された俺は、職にもありつけず物乞いにまで身を落としていた。みすばらしい格好を晒して、自尊心なんてものはとっくになくしていた。死ねば楽になるがそれでもきなくくらいの惨めさだった。

そんなとき、あの男に出くわした。仕立てのいいスーツなんざお召しになっていたもんだから、さぞ裕福だろうと恵んでくれと恥じもなく言い放った。そのときのあいつの顔を俺は忘れはしない。

暴言をはかれる事もなく、汚いだのなんだのとわめかれる事もなく、同情の眼差しでもなく。ただただ“驚愕”の表情がそこにあった。

まるで、知人に出くわしたかのようなそんなツラを俺に向けた。どうしてお前が、と目が訴えていた。

どんな暴言を吐かれるよりも、その視線に息が詰まった。足早にその場を立ち去って見たが、どうにもそいつのことが気になってならなかった。昔あったことでもあるのか。忘れちまうほ

ど、俺は耄碌したのか。この言い表せない、つかえはなんだ。

気になって、俺は男を見た場所に引き返した。それほど離れた場所ではないところで、路地に居る何者かと話しているのが見えた。揉めているのか、あの男が銃を取り出した。だが、何かに気付いたように発砲を止める。

もう少し、近づいても気付かれないはずだ。一体何を話している？あの男はなにものなのか、その答えが路地裏にあるのではないか。

そう思ったとき、何か大きな音とともに俺の足元に銃が転がってきた。モーゼルC 96。もう二度と銃なんか持つことはないと思っていたのに、その銃に手が伸びた。

袴の男が路地裏から出てくる。タイミングを見計らったようにやってきた、バイクに乗った女とその場を去っていった。あの青いジャケットの男はその姿を見送って無防備だ。その背後に向けて、高々と掲げられたナイフを見たとき、俺は無意識に発砲していた。

久しぶりに感じる発砲の反動。硝煙の香り。俺の放った弾丸は、寸分の違いもなくナイフをはじき落とした。

なぜ助けたのか、問われたところで俺はその答えを持たない。青のジャケットのあの男は俺

の肩を叩き、片目を瞑る。

「左でもまだやれるんじゃないか？」

疑問より先に、俺は自分の左手を眺めていた。

「やり直せばいい」

ワルサーP38を携えて、あの男は去っていった。気障で勝手な野郎だ。無責任なことを言いやがって、俺のことなんて何もしらねえクセに。そう思ったとき、ふと過去の記憶が脳裏を過ぎった。あの強烈な赤のジャケットの男。俺が全てを失ったあの日に、出くわしたあの男に似ている。

お前はまさかあの時の、などと疑問をぶつける間もなかった。あいつはまるで流れ星みたいに見えて消えた。あの時と同じだ。それっきり、あいつを見かけたことはない。

俺は底辺の底辺から這い上がることにした。昔の駆け出しに戻ったみたいに、何の仕事だつて受けた。

左でもまだやれる。昔プライドとともに失ったコンバット・マグナムの代わりに、あの時拾ったモーゼルC96を携えて。そうして再び名を馳せれば、あの男とも出くわすかもしれない。もしかしたら何か噂を聞くかもしれない。そんな淡い期待を抱いていた。会って何をする？ あ

いつは言いたただけいって去っていったんだ。だから俺も文句を言うだけだ。

聞きたいことも山ほどあった。だからなんとしても探し出して、なんとしても直接話をする必要があった。何人もの情報屋を手当たり次第に調べまわった。これであいつが気付いたとしても、それはそれでよかった。むしろ、あちらから来てくれるのなら万々歳と言ったところだ。

「ああ……もしかして“ルパン三世”のことか？あいつなら数年も前に消息絶ったままだよ」「腕はよかったがなあ。もう、引退したか、くたばっているんじゃないか」

“ルパン三世”という名の泥棒。狙ったものは必ず盗み出す。少し前までは活動していたが、今ではぼったり活動が途絶えた。行方も知れず。生死も不明。どんなに情報屋をあたってても同じような回答ばかりが来る。

消息を絶っただけの、引退しただけの、死んだだけの。馬鹿を言え。あの男がそんなに簡単にくたばるようなタマじゃねえだろう。

絶対に生きていてどこかにいる。俺は何人もの情報屋を当たり“ルパン三世”について調べてまわった。過去の新聞を読み漁ったり、昔アジトだったという場所にいくつも足を運んだ。なんとしても足取りを掴みたかった。

そうして、ようやく行き着いたのがこのアジトだった。皮肉にも“俺があいつに物乞いをし

た街”にこのアジトが存在していたのだ。

俺は予告状にかかれた文章を読みすすめる。

『俺もここまでのものは初めてで、どういうことになるのか正直わからない』

『ただ一つ、確実にいえるのは“お前と話したルパン三世”はもういないってことさ』

『だが、もしも、お前が“ルパン三世”と仕事をしたってんなら方法を教えてやるよ』

どういうことなのか、全く意味のわからないことばかりがちらちらと書かれている。だが、その方法とやらはひどく俺の興味を引いた。

「お前が書いたことがどういうことか、いまいち要領を得ねえがやってやるよ」

俺はその日、残されていた一枚の予告状を出した。

「本日二十三時“クレオパトラの心”をいただきに参上いたします。——ルパン三世」

もし、“ルパン三世”が生きているなら確実に来る。だが、来なければそれまでと諦めよう。ルパン三世は死んだと見做そう。その後はどうする。俺が一人で盗みに入るか。それとも、何もせずに帰るか。いや、答えはもう決まっている。

時計はあと十分ほどで二十三時を指し示す。警察はそれほど来ていない。予告状とはいえ、ほぼ名を聞かなくなった泥棒からの突然の予告状だ。きつといたずらだと思っているのだろうか。あと、五分。

“あのルパン三世”はご丁寧に進入経路から警備体制、盗み出し方まで書き残していった。俺はそれを懐にしまい込み、腰をあげる。

どうやら来ない。ならば、と。俺は緊張し震える拳に力を入れた。

“あのルパン三世”が俺に全てを書き残して去ったのは、いたずらのまま終わらせるなど言っているのだ。予告状を出したなら、出したものだけは必ず盗み出せ、と言っているのだ。“あのルパン三世”には恩がある。それが望みなら俺は恩に報いよう。何よりも、俺自身、その名をいたずらとして終わらせることは出来ないと感じていた。

「駄目だろう？ 人のこと勝手にかぎまわって、名前までつかっちゃあ」

俺が立ち上がりかけたとき、ひやりとした声が後ろから掛かる。振り返ったその先には燻っ

た男がひとり。あいつと同じ顔をしながら、全く異なる表情を浮かべている。自分の名を騙った不届き者の俺を冷たく見据えて、殺すか否か考えているようだ。

なにより、全てに飽きたかのような冷めた雰囲気がある。俺は声を出すことも、掛けることも忘れて、月明かりを背にたたずむその男を見つめていた。

男は何も話さない俺を見て、ため息をつく。そうして時計を見た。二十三時が過ぎそうだと判断した男は、スツと美術館の方へと向かう。俺はあの予告状にかかれていた意味を何となく理解出来た気がした。どういうことなのか説明をしるといわれても、きっと相応しい言葉が見つからずに、俺には到底説明しきれないだろう。

ただ、楽しくなってきた、と、今までに感じたことのないような、それでいてどこか懐かしい高揚を覚える。俺は迷いなく、あいつのあとを追った。ずっと探していたのだ。ようやく見つけて機会を得た。それを逃すわけには行かない。

何度でもやりなおせばいい、その言葉を思い返しながら。

『もし“ルパン三世”に会いたいなら“ルパン三世”の名を使って予告状を出せ』

『まだ“ルパン三世”がいて、泥棒の矜持があるなら必ず来るはずだ』

『自分の名前を勝手に騙った不届き者の面を拝みにな』

『古いかもしれないが、目標と各種情報はここに置いていく。もしやるなら、試してみろ』

『お前の左での射撃、シビれるくらいよかったぜ』

『あばよ、次元大介。どこか別の時間での相棒ルパン三世より』

